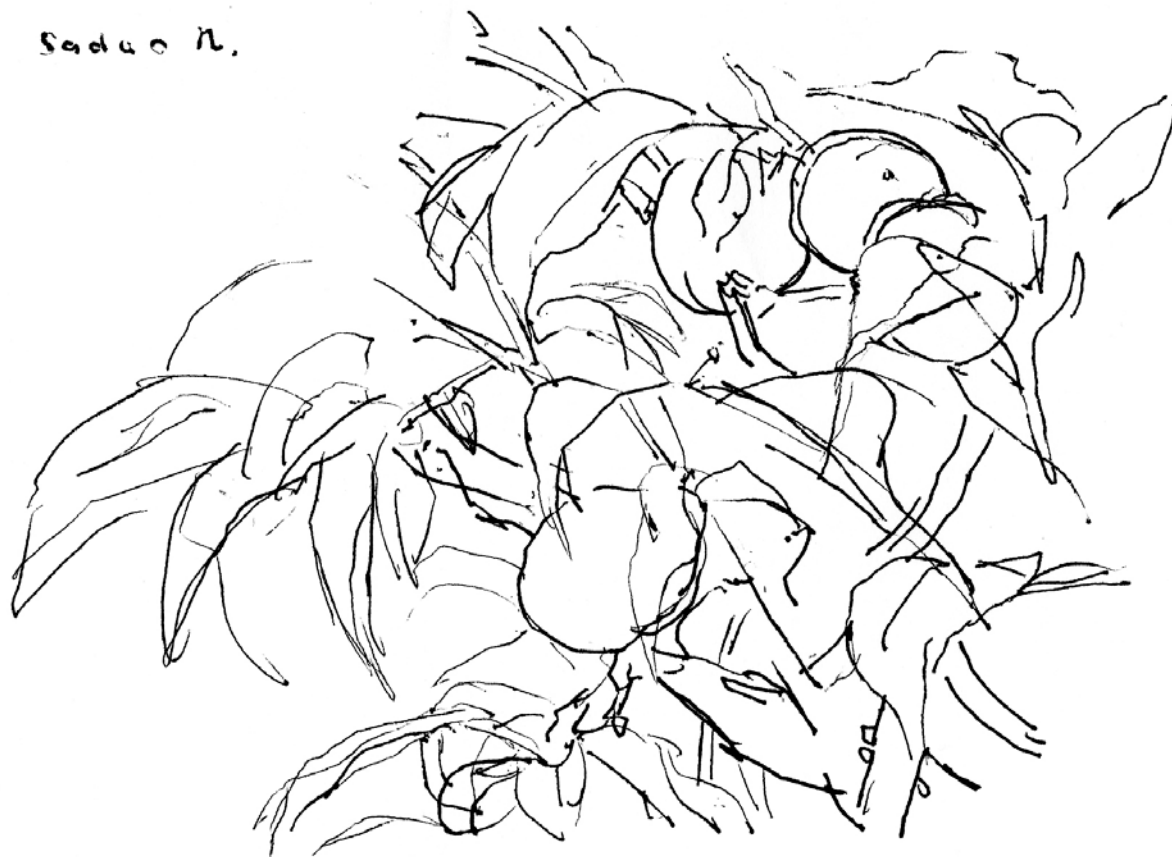


登録有形文化財
畑田家住宅活用保存会年報

No.11 / 2012

Saduo N.



梅の実 (庭の植物シリーズ)

<畑田家住宅活用保存会 2012 年度行事予定>

春の一般公開と医学フォーラム 2012 年 5 月 13 日

「いのちの不思議」

元大阪大学総長・大阪大学名誉教授

岸本 忠三

秋の一般公開と衣育フォーラム 2012 年 11 月 18 日

「ヒトはなぜ服を着るのか」

大阪大学文学研究科教授

武田佐知子

春の一般公開と経済フォーラム 2013 年 3 月 24 日

「先人に学び、未来を語ろう」

大阪大学経済学研究科教授

堂目 卓生

第 16 回畑田塾 2013 年 5 月 12 日

「宇宙で一番低い温度を作る」

帝塚山学院学院長・元大阪市立大学学長

児玉 隆夫

会長 畑田 勇

春よ 3 月。「花も嵐も踏み越えて、行くが男の生きる道」東北地方被害の皆様、大変ご苦労様です。心からお見舞い申し上げます。

突然、東北地方広範囲に発生した、世界最高レベル、マグニチュード M9 の大海底地震は、古今未曾有の高さ 15 m に及ぶ大津波を巻き起こしました。広範囲の建物を押し流し、また、数十トンの船を丘に引き上げたエネルギーは膨大なものです。さらには、近代産業の一大エネルギー源である、用心賢固な原子力発電所に、大事故、大爆発をさせました。広範囲に巻きちらされた多量の放射性物質は、長期にわたる膨大な被害除去の大きな課題を残しました。誠に有史以来の大惨事と言うべきであって、これらの事故に、直接間接に被害を受けた人的・物的損害は、最悪の状態と言わねばなりません。日本全国民の力を結集して、対処しなければなりません。

加えるに、夏の到来に至り発生した台風は、その威力を増し、特に本年は集中的大豪雨の連続となりました。しかも、台風の停滞にともない、限られた広範囲の地域に、2 万年に 1 度と言われる莫大な降雨をもたらし、数多くの土砂災害を引き起こし、地域の住民に、はかりしれぬ不安と大災害を発生させ延ております。吉澤則男、

激動の昭和の時代を過ぎ、何とかして迎えた平静な平和への念願と裏腹に、次々と惹き起こされる数々の事件は、私どもに大衝撃をもたらしました。

どうあっても、これらの障害を克服して、念願の「平成」を達成するため、最大限の努力をして対処しなければなりません。これが平成の時代に望む大前提になろうとは、予想を越えた現実の厳しさを如実に感得体験し、総力を挙げて回復に邁進しなければなりません。

先の阪神淡路大震災に於いて、ある小学生は、あまりにも激しい被害の現状に驚いて、言葉を失い『神様のいたずら』と考えました。今回の東北地方に連続して発生した数々の事件を目撃し体験した中学生の一人は、卒業式の答辞を、涙を流しながら読み上げ、「天を恨まず、数々の事件の発生を運命と定め、これらに敢然と立向かう努力をすることが、我々に与えられた使命である」と結論づけました。

誠に、深遠にして壮大な理念・構想にもとづく勇敢な発言であります。聞く人々に、きわめて大きな感動を与え、感涙にむせびました。

＜梅の実＞庭の梅が実を付けた。久方ぶりのことで、数えてみると 20 程あった。花を描いたのは度々あるが、実は初めてである。(中村貞夫)

1. 第 14 回畑田塾 5 月 15 日
「お能ってなあに？」 能楽師 山本博通
「子供の遊びを考える」
畑田家住宅活用保存会 畑田耕一、畑田 勇
吉山 輝、蒲池幹治
大西麻容、矢野富美子
2. 畑田家住宅見学会 10 月 6 日
羽曳野市立丹比小学校 4 年生 140 名
3. 秋の一般公開と教育フォーラム 11 月 20 日
「高齢化社会を生き抜くには」
医療法人はただ診療所前理事長・医師
畑田耕司
4. 第 15 回畑田塾 3 月 25 日
「オルゴールを科学する」
畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田耕一
「いろんな音でリズム遊び」
関西二期会・相愛大学講師 畑田弘美
5. 出版
「これからの教育—変えねばならないこと、変えてはならないこと」(出版シリーズ No.9)
関口焔、池田光穂、栗山和之、大友庸好、山本清、
疋田和男、久堀雅清、安倍孝人、戸川好延、
吉澤則男、畑田耕一

役員

会 長	畑田 勇
副 会 長	甲斐学、畑田拓男、中村貞夫
事務局長	畑田耕一
幹 事	石井智子、奥田 寛、織川久子、 笠井敏光、畑田弘美、矢野富美子 畑田達也、北山辰樹
会 計	畑田庸雄
会計監査	澤田秀雄、塚本昭光

新正会員

松本新太郎	黒河 洋	豊島了雄	久保田拓鑑
吉岡政彦	東島 清	清原久和	松宮ゆかり
吉田睦子	森本博明	伊勢智一	片岡一則

新特別会員

山本博通	畑田耕司		
------	------	--	--

*昨年の年報で事業報告の年度を、平成 22 年度とするべきところを、平成 21 年度と誤記してしまいました。お詫びして訂正いたします。

本年の行事に参加していただいた方々からの感想文
第13回畑田塾 2011年3月20日

「私たちの四季、音楽とガラスの世界に遊ぶ」

ヴァイオリン 木野雅之 ピアノ 吉山 輝
ガラスアート 畑田美智子

◆昨年畑田美智子さんの作品に初めて出会い、すっかりファンになりました。もともとガレやミュシャなどアールヌーボーの芸術作品が大好きで、彼女の作品はそれを彷彿させるうえに、日本人としての繊細な彼女独自の世界があり、懐かしさすら感じさせられます。

音楽とのコラボレーションはとても良い企画で、興味深く楽しみにしていました。会場もこの企画に申し分ない格調高くどっしりした旧い民家。その存在感で全てを温かく包んでくれました。

テーマは四季。演奏はヴァイオリンとピアノ。力量のある演奏家の奏でる音は臨場感に溢れ、畑田さんの作品の暖かな光を見つめながら奏でられている曲の情景を描いておりました。曲目の解説もよく判り、進行もアットホームな空気に満ちていました。このような機会を与えて下さったことに感謝しております。(大阪市 石川和代)

◆ピアニストの吉山先生のファンで、家族5人で参加しました。バス通りから脇道に入り白壁沿いに歩いて行きました。大きな門をくぐり天井の高い土間に上がった時には大正・明治へとタイムスリップしたかの様でした。

幻想的な美しいガラスのスタンドを見ながら木野先生の艶のある深く広がるヴァイオリンと吉山先生の清らかで優しくも時に情熱的なピアノの共演に、私は包み込まれて陶酔し、おぼろげな意識の中で「自分が誰なのか？今何処に居るのか？自分に何が出来るのか？」と妄想を繰り返しながら東日本大震災で日本中が深い悲しみに在る今、ここに居て、多くの方々で感動を共有している確かな幸せを感じていました。(富田林市 庄村美和)

◆「私たちの四季、音楽とガラスの世界に遊ぶ」に参加させて頂き、心に残る1日を過ごさせていただきました。案内をいただいた時、あまりなじみの無い春夏秋冬の曲に対しての興味、そして久しぶりのランプたちとの再会など、いろんなことに期待を寄せつつ演奏会に臨みました。ガラスの作品はいつもと同じように、優しく温かく私たちを迎えてくれました。演奏も素晴らしく、木野先生のヴァイオリンは悲しいほど美しく、また重々しく、時には激しく、すばらしいテクニックで、聞いている者の心をとらえました。吉山先生のピアノはすごい迫力で、

圧倒される思いでした。ヴィヴァルディの四季は、これまで室内楽としてしか聞いたことが無く、ピアノとヴァイオリンのコラボレーションはどんな様子か想像できませんでしたが、両者が単なる独奏と伴奏という関係ではなく、同等でお互い尊重しあっておられ、長い間コンビを組んでおられる息の合った演奏で、深く感動いたしました。ホールで聞く演奏会と違って、間近に目の前で聞かせて頂き、また、日本民家の造りのためか、音の反響と吸収のバランスがとても良く、素晴らしい響きで、贅沢で何ともいえないひと時でした。本当に満ち足りた、後々まで心に残るであろう演奏会でした。有難うございました。帰り道、ふと、この音色を東北の方々へも届けられたらと思いました。(藤井寺市 藤本佐代子)

◆ヴァイオリンとピアノとガラスとが、それぞれに四季を表現するコラボレーション。登録有形文化財の日本家屋で開催されるということで、ほのぼのとした雰囲気のもと想像していました。

ところが、歴史が刻まれた漆黒の柱に響き渡る音色は温かくも力強くシャープであり、演者の息遣いが聞こえる程近いところで繰り上げられる演奏は、どんなコンサートホールでもまず体験できない迫力がありました。

後半に演奏されたヴィヴァルディの四季に比べて、前半のメンデルスゾーンの春の歌、フィビヒの夏の夕べ、レスピーギの秋の詩、イザイの冬の歌と、あまり耳になじみのない曲ではありましたが、それぞれが絶妙に四季を感じさせ、ガラスアートが表現する四季と共鳴する様は秀逸でした。

特に冬の歌では、当日が東北地方太平洋沖地震の発生からまだ一週間あまりであったこともあり、その音色がレクイエムのように静かに深く参加者の心にしみわたりました。個人的にも数年前まで学生生活を送っていた仙台の町や恩師、学友の顔が脳裏をよぎり、涙が頬をつたうのを禁じえませんでした。

そんな時でも、日本家屋のやさしい雰囲気は皆を包み込むように癒し、日本家屋のもつ奥深さを再確認する機会となりました。(吹田市 伊藤周徳)

第14回畑田塾 2011年5月15日

「お能ってなあに？」

能楽師 山本博通

「昔の遊び」 畑田家住宅活用保存会 畑田耕一、畑田勇、矢野富美子、吉山輝、蒲池幹治、大西麻容

◆はただじゅくにいってすぐたのしかったです。おとをならすのもたのしかったです。おてだまもほかにもいっぱいあったのしかったです。(八尾ニューモラル生涯学習クラブ わたりさき、6歳)

◆初めて参加させていただきました。能楽師の方のお話しが 特に興味深く時間があっという間に過ぎました。全く無表情に見えるお面ひとつで 様々な感情を表現できることに感動し、奥深さを感じました。ピアノのお話しも楽しかったです。音の出るしくみを知ると 音の感じ方も変わるような気がします。何に興味を持つかは 人それぞれですが、いままで全く意識せずにいたことも 少しでも知ること 自然と耳や目に入るなあ、と思いました。

盛りだくさんの内容に、親子で楽しく過ごせました。ありがとうございました。(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 渡利ひろみ、わたりさきの母親)

◆今日、畑田家住宅で、いろいろな昔の遊びを体験しました。お手玉をしたり、紙飛行機を作って飛ばしたり、糸取りで遊んだり、折り紙を使って多面体を作ったり、一発で開ける紙の折り方を教えてもらいました。ちなみに紙飛行機はハガキと割りばしを使ってつくりました。普通に折り紙等で作った紙飛行よりは丈夫だったけれどあまり思うようには飛ばせませんでした。

私の中で特に印象に残ったのは一発で開ける紙の折り方です。その折り方は地図等にも使われている折り方で「ミウラ折り」と言うそうです。ミウラ折りは一瞬で開くことができ、畳むときも一瞬で、山折り部分と谷折り部分が固定しているので破れにくく、すごく便利な折り方だなあ～と思いました。でも、折り目をつけるのが少し大変で一枚の紙を折るのにすごい時間が掛かってしまいました。又、紙全体を見たい時は、ミウラ折りでもいいけれど、ある一部の場所をみたいときにはいちいち全体を開いてしまうので不便だと思いました。しかし「ミウラ折り」は人工衛星から飲料の容器にまで応用されていて、物凄い技術なんだと思いました。

今、わたし達からするとお手玉や糸取りなどの遊びは昔遊びだと思うように、わたし達が今やっている遊びは、未来の子ども達からすると昔遊びになるのかなあ～と思うと不思議な気持ちでいっぱいになりました。(豊中市立少路小学校 5年 畑田真衣)

◆畑田塾とはどんな会合なのか全く分からないまま初めて参加させて頂きました。お能のお話のさわりの部分を分かりやすく解説して頂き、実際に自分たちが声を出してお能の発声方法を体験したり、本物の能面を近くで見ることができたりと、日頃このような日本文化と全く関わりのない私ですが、すごく新鮮なインパクトを受けました。残念ながら午後からは時間の都合で参加できませんでしたが、自分にとって非常に貴重な体験でした。特に、あの貴重な

住宅の中で、皆が座敷に座るといふ家庭的な環境の中で、講師の方と本当に近い距離で親近感を感じながらお話を聞けるのが、普通の講演会にはない強い意味をもっているように感じました。またの機会があれば、少し内容を予習して参加してみたいと思っております。(大東中央ロータリークラブ 長崎弘芳)

◆歌舞伎や文楽に親しむ機会は結構多く持っています。でも、お能となると、どうしても足が進まないのですが、今日、観世流シテ方山本博通さんの講演を聴き、一寸思いが変わりました。山本師が、持参された能面を参加者に付けて、どう見えるかなど体験を踏まえた講演で、「かしこまる必要はありません、カジュアルな気持ちで来てください。眠たければ寝て下さってもかまいません。兎に角一度来て下さい」、「日本人が日本語で喋っているのが日本人にわからない筈は無い」と仰いました。確かに、歌舞伎、文楽は、気軽に行ける芸能ですし、よく聞いていると分かるものです。能、狂言も同じで良く聞いていると分かるでしょう。山本能楽堂へは落語を聴きには行ったことは有りますが、「上方伝統芸能ナイト」を手始めにお能に関わってみようかと思いはじめました。

続いては子供の遊び。やりましたねえ「べったん」、「バイ」、「独楽」、ボール遊びも…。街中に育ったので、狭い道でも遊べる、駄菓子屋に売っていた庭球を使って色々。それに「紙飛行機」、子供の時は結構上手く飛ばせていたのに…。参加者の皆さん、皆、昔を思い出して、そう、50年も60年も昔に戻っておられました。何故か突然に、大学時代下宿の窓から友達と紙飛行機を飛ばした事を思い出しました。何故、そういう事になったのかは思い出せません。自分で作って遊ぶというのは、楽しい思い出になり、齢を重ねた後も、また蘇ってくるものですね。ゲーム機で遊ぶ今の子供たちは、大人になってどう思うのでしょうか。(放送大学 近藤芳史)

◆大阪万博の二年後に誕生した世代では、達磨落としという木材の遊具があり、バランス、色彩、タイミング、数、コミュニケーション、ゲームなどを習得したと思います。

しかしながら 小学生の時に既に流行していたコンピュータゲームでは、このようなことは困難でした。インターネットツールでも、温かみ、質量感、スリル、ハプニング度が違います。忍術や漢方薬、和算、衣食住などの全てにおいて、日本の素晴らしさと自然災害の多い日本で生きていくための知恵をつけることができた私の世代は幸せだったと 畑田塾を経て感じました。(大阪市 横山明美)

◆平成23年5月15日日曜日、晴天、「畑田塾」に向いた。会場は国登録有形文化財畑田家住宅。さすがに由緒あるお屋敷。大阪大学名誉教授畑田耕一先生のご実家。まさに異空間！

午前の部が「お能ってなあに？」。講師は能楽師・

観世流シテ方山本博通先生。「能」って言うとなつて構えてしまうほど敷居が高い伝統芸能と思っていたが、山本先生のお話の楽しさに時間があつと言う間に過ぎていく。「能楽師より吉本新喜劇を志望していた」と本人が話されていたが、成るほどと思わず頷く。

「能」の敷居の高さは何が原因なのか？「能面」の不思議？「謡曲」の発声法と節回し…等々興味深い内容がぎっしりと楽しさのゼリーに包まれた濃密な時間を堪能した。子供たちに日本の伝統文化を伝えたいという先生の情熱がひしひしと伝わってきた。

午後の部は「子どもの遊びを考える」。一転して全員が童心に帰って遊びまくった。紙飛行機に独楽回し、だるま落しにけん玉、おはじき、あやとり、竹とんぼと次から次に繰り出される遊び道具にすっかり夢中、みんなの顔が幼子に変わる。お次はピアノの解体ショー。エッ！ピアノってこんな仕組みだったの？大人もビックリ子供もビックリ！ピアノ演奏でまたビックリ！さてお次はコップ演奏。水の量でドミノを作るってのは、知っているが、畑田塾はもう一ひねり！水の質で音はどう変わる？なるほど考えてみなくちゃわからない。とにかく何故？何故？何故？遊びも音楽も全て何故がテーマの畑田塾。最後は何故の極めつき吉山先生のマジックショー！「何故だー」の声も上がる不思議世界の登場だ。みごとに騙され続ける私たち。種明かしを聞いて又々ビックリ！既成や固定の概念が、見えるもの、見ているものを、見えなくしているということに気がつかされる。私たちは気がついていないけど、こんな事が日常でもいろいろあるんだよね。

と言うわけで私の心の中で、この日の畑田家住宅は、見事に異空間となっていた。まるで、アリスの不思議の国にまぎれこんだように……。あつという間に時が過ぎ、幸せな気分と優しい心をお土産に家路につきました。次回の畑田塾は、どんな顔を見せてくれるのだろう。楽しみ！（大阪市 吉岡政彦）

フォーラム 2011年11月20日

「高齢化社会を生き抜くには」

医療法人はただ診療所前理事長・医師 畑田耕司

◆素晴らしいフォーラムでした。2050年には日本の65歳以上の人口は3,000万人以上になると予想されます。畑田耕司先生はこの数字の持つ深刻さを分かりやく誠実に解説されました。65歳以上になっている私は「高齢化社会を生き抜くため」の何か良いヒントが得られるのでは…とっていました。しかし、この安易な気持ちはすぐに消え、高齢者に対する施策など日本社会の難しい問題に

直面することになりました。言うまでもなく、終末期医療と高齢者医療の現状は、今ここにある私たちの「生き方と死に方」に繋がります。この問題に対して、精神科医である畑田先生は「幸福とは」、「健康とは」と哲学者としての問いを発せられます。しかも、ごく普通の言葉を用いて。「年寄りには優しい言葉を求めているんですよ」、「人とのつながりが大切なんですよ」、これらの平易な言葉の内実とそれを行うことの難しさを、このフォーラムは問いかけていました。「医者とはサービス業で、芸者さんのように現場にいないといけないんですよ」、「医者選びは街の噂が大切ですよ」などの名言にも触れることができ、このようなお医者さんが身近に居られたら心強いのかな…との思いを抱き、由緒ある畑田家を後にしました。

（高知工科大学名誉教授 細川隆弘）

◆生きてきた人生経験が役に立って、すこしずつものが見えるようになり、人の話も素直に聞けるようになりました。今が一番という気持ちで過ごし、これがずっと続くものと思っておりました。でも、今日のフォーラムに参加して、これからの医療の問題を考えると病気をすれば今の生活がくずれ去るということをお教へいただきました。いま、私は、限界集落といわれる所に住んでおります。若い人たちは、車で出かけ買い物をするため、近くにあった商店は姿を消しました。まず元気で無ければ住めない場所になったのです。鳥の声で目覚め、6時に鳴る寺の鐘で起きています。人に頼らず、体を動かし、地域社会の人達とのより良い関係の中で、与えられた時間を、有意義に過ごしたいと思っております。

（生駒市 吉田睦子）

◆後期高齢者の私は、骨のリハビリで近くの病院に通っております。これまでは病院の領収書を詳しく見ることがなかったのですが、畑田塾を受講するにあたって調べてみると、色々な項目が記載されていることに気がきました。保険の種類や、負担の割合についても、今一度考えさせられました。高齢になると通院や入院の頻度が多くなり、薬代も増えます。医療や年金などの高齢社会に対する問題を早期に解決していただいて、世界トップクラスの日本の平均寿命を誇りにしたいと思います。

介護保険を利用している私の知人たちは、様々な環境にあります。今年の初めに、老人ホームで暮らす友人を訪ねました。先日その老人ホームに電話すると、友人は退去したとのことでした。連絡を受けた友人の家族から私のところに電話が入りました。「母は痴呆が出てきたので、病院に入院しています。近々、

違う老人ホームに移ります」との返事でした。別の歩行困難な友人は、デイサービスに週2回通っており、訪問介護、リハビリ、ヘルパーさんによる掃除や買い物などのお世話にもなっています。その人は、ありがたいことだと喜んでいました。また、高級ホテルのような老人ホームから、趣味の教室にタクシーで通い、生き生きと暮らしている人もいます。

私は、四季折々に変化する自宅の庭を眺めながら草木と対話して過ごし、「今日も庭に出られて、良い空気を吸うことができたな」と、日々の生活に感謝しています。小さい庭ですが、草木の間に旬の野菜も植えて、その成長も楽しんでます。畑田耕司先生の「高齢社会を生きる」を拝聴して、できるだけ入院や介護の世話にならぬように、元気で幸せに過ごせたらと思いました。（羽曳野市 畑田千世子）

◆「高齢社会を生きる」のお話を拝聴した。私自身はまだ先の話しと思い実感がなかったが、聞いているうちに、今から考えておくテーマだと気付いた。それは、高齢者に対する国の政策は、その時の世界情勢や自国の経済状況等で変動するものである。それに頼るのではなく、自身がどのように生きるか、という理念や倫理観を持つこと、社会との係わりを持ち続ける土台を今から作り上げておくことが大切なのではないかと思った。（羽曳野市 畑田弘美）

第15回畑田塾 2012年3月25日

「オルゴールを科学する」

畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田耕一

「いろんな音でリズム遊び」

関西二期会・相愛大学講師 畑田弘美

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

畑田家での音楽会～光と音のクラシック～

埼玉県吉川市 大西 麻容

第15回畑田塾「私たちの四季、音楽とガラスの世界に遊ぶ」を一言で表現させて頂くとすれば、『日本的光と音のクラシック』と言えるのではないのでしょうか。まず、音楽はクラシックピアノの吉山輝さん、ヴァイオリンの木野雅之さんが選曲された「春」、「夏」、「秋」、「冬」をテーマにしたクラシックで、その後に有名なヴィヴァルディの「四季」が続くというプログラムでした。昔から短歌や俳句に『季語』が使われることから分かるように、『季節』は昔から私たちにとってとても親しみ深く、大切にされてきた日本人の生活の一部です。演奏を聴いた人誰もが、それぞれの心の中の「春」、「夏」、「秋」、「冬」と「四季」の情景を連想して音楽と融合することができたのではないかと思います。

その思い描く情景を更に情緒深くさせてくれたのがガラスアートの作品でした。サンドブラストと聞くと洋風のガラスアートの技術に聞こえますが、実際に畑田美智子さんの作品を拝見させていただくと、そのモチーフは日本の風景であったり楓の葉や桜の花であったり、和をイメージする自然を多く用いておられます。そして、そのモチーフがこれ以上ないほど作品にぴったりと馴染んでいるのです。とりわけ、今回のランプにおける畑田美智子さんの作品の数々は、日本の灯籠を彷彿とさせてくれました。しかし、それよりも私に灯籠を連想させたのは、それを見た場所が日本家屋の畑田家だったということが大きな要因だったのかも知れません。あらためて、「家」というものの存在感をひしひしと感じました。

家は全てを内包してくれます。それは家の家具だけではなく、ガラスを通すことでやわらかく、やさしく物を照らし出す光、音、匂い、そしてそこに居る私たちとその生活をも包んでくれるように思いました。「春」、「夏」、「秋」、「冬」と曲が移るとともに、季節ごとのテーマで創られた作品に明かりが灯る様子は聴覚だけでなく視覚も刺激して、そこに居る私たちを非日常へと連れて行ってくれました。畑田家の日本家屋が包んでくれる音楽と光は、その場では私たちが昔から慣れ親しんできた和の空間と相まって、とても心安らぐ、心地の良いものでした。それは必ずしも私たち日本人だけではなく、その場に居たすべての国の人々にとっても同様の安らぎではなかったかと思えます。音楽でもガラスでも、芸術を美しいと思う心は万国共通です。そしてまた生演奏の素晴らしいところは、音の振動を体で感じる事ができる点です。その点でも日本家屋で音楽を聞くことは素晴らしい経験だと感じました。

昔ながらの日本家屋は木造建築です。音は、木造の建築によく響きます。音楽と日本家屋との相性がこんなにも良いものかと皆さんもきっと驚かれたことと思えます。この日、音楽が始まると畑田家住宅は一瞬にして良質のミュージックホールと同時にランプミュージアムとなりました。このような日本本来の文化の素晴らしさを、日本人である私たちだけでなく、ぜひ昔の日本を知らないこれからの子供たちに、そして海外の人々にも共有してほしいと思いつつ畑田家を後にしました。

日時ははっきりしないが、一昨年暮だった。何かあるとよく電話して来られる畑田先生から「来年の畑田家住宅活用保存会の催しは“昔から伝わる日本の遊びを取り入れた子供向けの催し”にしたいから協力してほしい」との依頼であった。阪大にお世話になって以来ほぼ半世紀にわたるお付き合いでもあり、お引き受けすることにした。引き受けてしまったものの中々エンジンがかからない。催しまで1週間となった3月11日そろそろ準備をしておこうと、梅田にできた丸善ジュンク堂へ行った後、阪神百貨店で食事をしていて。となりの食卓の人が、「今、目眩を起こしたが貴男は何も感じませんでしたか」と聞いて来た。個人的には感じていなかったもので、畑田家での催しのことだけを考えながら食堂をでた。地下道での人の会話から、東北地方で大地震が起ったことを知った。帰宅して、テレビをつけると地震後に津波が襲い、無惨な光景に呆然としながら、次々と送られて来る映像に心が痛んだ。その後、原子力発電所の重大事故が加わり、未曾有の大震災となった。震災や原発事故という惨劇に見舞われながらも、感情をむき出しにした混乱も起らず、粛々と復興に向かって努力する被災者の姿に、以前読んだ民族学者宮本常一氏の本「忘れられた日本人」に書かれていた一文を思い出す日々であった。それは、秩序と規律を乱すこと無く、死せる者を深く哀悼し自らを癒しながら立ち直って行く人々の姿、すなわち、地縁・血縁共同体の絆が甦る日本人の姿である。

その9日後の3月20日の音楽会、そして2ヶ月後の今回、畑田家の門をくぐった時に、その門構えと住居に地主の名残りが感じられ、忘れかけていた日本人の共同体の絆の原点に触れたような気がした。もう死語になった地主と小作人の心の絆である。地主と小作人との暖かい心の絆を持ち出すと、差別的発言として進歩的と称する学者や文化人の反発を招くであろうが、長年続いた日本的地主制度が日本人の特性の一端にあることは否定できないと思っている。戦前の日本には地主制度があり、地主と小作人との関係は、概ね良好な人間関係で結ばれ、地方の生活や文化の向上に貢献していた。地主制度は封建的な身分制度で、米国の統治に始まる米国流民主主義には馴染まないと判断したGHQは農地解放との名の下に地主制度を廃止した。私が新制中学に入った昭和22年に新憲法が公布され、社会科の時間には地主は小作人に異常な労働を課し、搾取した悪人の集団の如く教えられた。近親者に地主があり、その行動は、家族にも近い存在であったことを知る者として、違和感をもって授業を聴いたことを思い出す。

畑田家住宅活用保存会の活動の趣旨は、その活動を通して日本の建築美とその伝統、さらには日本人の心を子孫に伝えたいとの思いからと伺っていた。その背景には、共同体をつくり、地域社会の心の絆に貢献した地主制度の遺伝子があるのではないかと思いながら、畑田家住宅活用保存会の催しに参加した。

今回、2011年5月15日の「畑田塾」の催しは、日本が世界に誇る伝統芸術として能楽の普及に尽力されている観世流シテ方の山本博通さんの「お能ってなあに？」というお話に始まった。650年前観阿弥・世阿弥の父子によって確立された能楽の歴史に始まり、それがわが国固有の文化として普及し、日本の伝統芸術に発展していく経緯、能楽における声の出し方、足の運び方などを、能面を見せながらお話いただいた。その後、山本さんとの質疑応答では能面を付けさせての解説もあり、参加者の能への関心が高まるのが感ぜられた。個人的には、静かな動きの中から多くのことを表現する能特有の深さが、東北の被害者の姿と重なり、日本人の心に影響していることを感じた一時であった。

「子供の遊びを考える」は、ピアニストとして畑田家住宅活用保存会を盛り上げておられる吉山輝さんが趣味とされている紙飛行機作りに始まり、日本に伝わる幾つかの子供の遊びが取り上げられ、それぞれおもちゃを動かす体験は、参加した大人にとっては童心に戻る一時となっていた。子供の参加者が少ないのは残念であったが、日本古来の遊びには1つ1つに科学や技術があり、コンピューター時代の現在に体験させたい遊びで、小学校の理科教育に取り入れられれば、子供の好奇心を喚起し、理科離れをくい止めるのではないかと感じながら、興じる参加者を眺めていた。最後には、折り紙細工の究極と思えるミウラ折りの実演の後、講師の指導により、参加者はミウラ折りを体験した。ミウラ折とは、三浦公亮東京大学名誉教授が在職中に、地図の折り畳み方として考案した方法で、紙の対角線部分を押し折り引いたりするだけで即座に展開・収納が出来る点に特徴がある。その手法は、人工衛星の太陽電池の開閉のような最新技術の他、薄肉で軽量の耐圧容器や耐圧ホースなど身近な製品にも利用されている。ミウラ折りの体験は、その展開を知った参加者に大きな感動を与えていた。

今回の催しは、日本家屋の中で参加者が共に遊び、共に遊ぶことで心の絆を深めるのが感じ取れ、日本人の心の原点にふれたような一日であった。このような催しが日本中に広がるのを念じている。

畑田家住宅への思い

羽曳野市教育委員会教育長 藤田博誠



畑田家住宅の写真集を手にし、畑田先生御夫妻の案内で、住宅の内部を見せていただいたのはもう三年前のことです。それぞれの場所に先生の幼き頃の思い出がつまっており、語る先生の頬がゆるんでいる様子を楽しく拝見させていただいていましたが、殆ど垂直の階段をあがって「つし二階」に足を入れたとき、私の脳裏に故郷がよみがえり、そこは私の世界になったことを鮮明に覚えています。

私の故郷、母親の実家は徳島県の吉野川流域にあり、洪水を予想したかのように高く石垣をつんだ江戸末期の古民家として、内部は畑田家住宅によく似ており、それだけに懐かしい感覚となりましたが、よみがえった私の世界は「幼き頃、泊まったとき」のことです。夜のことです。私は、ザワザワという雨の音で目をさました。母に「昼はあんなにいい天気だったのに雨が降っている」と話すと、母は「外をみてご覧。星がいっぱい出ているよ」と指を差しました。当時、田舎の家は戸締まりをしなかったのです。そして「二階にあがろうか」といって私を起こしたのです。二階は私にとって未知の世界でした。何回も泊まっても一度も足を入れていないところに向かうのは大変な冒険でした。雨で水浸しになっていると思われる二階に向かつて垂直に近い階段を上っている私の胸中を想像してください。その二階で懐中電灯の先に見えたのは、桑の葉っぱを噛み砕いている無数の蚕の姿でした。畑田家住宅の二階で見た空間は、私にとって蚕の逞しい音とかぐわしい匂いの場所となったというわけです。以来、私が畑田家住宅を訪問するとき最初に目を向けるのは、二階の窓ということになっています。あの窓の向こうにどんな風が吹いて、何かが起こっていないかと想像するだけで少年に戻ったような感覚となるのです。

本年(2011年)の広報「はびきの」10月号のなかの「羽曳野市まちづくり戦略会議」で歴史文化遺産を生かしたまちづくりについて、畑田先生は「古民家を残していく手だてが必要だと思います。例えば、市の指定文化財に指定するなどの支援が欲しいのです」と提言されていますが、私自身、重く受けとめねばと思っています。古民家に流れる風のなかでの体験学習が子どもたちに歴史文化を大事にする心を育てることは間違いありません。そして私のように少年になれる場所としても……

平成 23 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日までの収支決算^{*1}

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	41,923	講師謝礼	80,000
会費	567,000	資料・年報・出版作成費	302,400
寄付金・協力金 ^{*2}	37,000	通信費(郵送料、振替手数料等)	54,565
雑収入	39,630	事務用品費	32,760
合計	685,553	雑費(講師接待他)	49,082
		別途積立金	100,000
		次年度繰越金	66,746
		合計	685,553
別途積立金 ^{*3} 合計	200,000		

^{*1} 会則第6条の規定に基づき、平成23年度の収入及び支出に関し、決算並びに関係書類を厳正に監査した結果、いずれも適正かつ正確に処理されていることを認めます。平成24年3月31日 会計監査 澤田秀雄◎ 塚本昭光◎

^{*2} 畑田耕司、神野武男、藤田博誠の3氏より御寄附を頂きました。感謝申し上げます。

^{*3} 当会では、ホームページに掲載している論文、随筆の中のいくつかをまとめて、会の活動の成果を示す書籍として出版する予定です。この積立金は、そのための資金に当てつもりです。

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸 471 畑田庸雄 電話 072-762-7495

E-mail hatada@wombat.zaq.ne.jp

畑田家住宅活用保存会ホームページ <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/>

会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いします。

あとがき：年報 No. 11 をお届けします。厳しい社会状況の中、皆様のご協力のお陰で色々な行事を開催させて頂き、ご参加の方からご好評を頂きました。これからも幅広い活動を続けたいと願っています。よろしくご支援の程お願い申し上げます。(S. N.)